法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-09-01

金春秋の王位継承

三池, 賢一 / MIIKE, Ken-ichi

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Journal of Hosei Historical Society in Hosei University / 法政史学
(巻 / Volume)
20
(開始ページ / Start Page)
113
(終了ページ / End Page)
124
(発行年 / Year)
1968-03-20
(URL)
https://doi.org/10.15002/00011742

Hosei University Repository

金春秋の王位継承

三池賢一

(一)

七世紀中葉の新羅は対外的に急速な発展を遂げ、文武王代の朝鮮半島統一国家に成長するが、この国勢伸張は単に武烈、文武両王の百済、高句麗攻略によるものではない。新羅国内の変革に負うところ大である。特に、約一世紀に亘る中代王代の繁栄は専制的王権の確立ある故である。では、新羅中古王代の所謂、慶州豪族集団支配体制から王権の絶体性を確立させ得たのは何か。爰に中代王代の初代とされる太宗武烈王（金春秋）が新羅史研究に重要な位置を占るのである。彼が王位を継承する六五四年を中心とする時期の新羅政局の動向を考察する必要がある。そこで、本稿では、金春秋の王位継承に絡む新羅政局の変動過程を分析してみる。

金春秋が王位を継承したことが、即、新羅政局の転換を意味するならば、新羅史研究の課題である聖・真両骨[1]、時代区分[2]についても何等かの解明点を指摘し得るのではなかろうか。[3] 筆者なりに先学の成果を踏まえて論を進めてみることとする。

註

(1) 「三国史記」は真徳王までを聖骨、太宗武烈王以降を真骨とし、「三国遺事」は中古王代を聖骨とし、太宗武烈王以降を真骨としている。

(2) 新羅の時代区分は「三国史記」によれば始祖赫居世～真徳王を上代・太宗武烈王～惠恭王を中代・宣徳王～敬順王を下代とする。「三国遺事」によれば始祖赫居世～智証王を上古・法興王～真徳王を中古・太宗武烈王～敬順王を下古とする。共に三分法である。

(3) 時代区分・聖真両骨区別共に太宗武烈王即位を境としている。然も、「三国史記」「三国遺事」共に太宗武烈王即位に区分線を引いている。これは偶然の一致とは考えられない。従って、太宗武烈王の即位が時代区分、聖真両骨区分

Hosei University Repository

の基点となっていることは明かである。

（二）

扨て、金春秋の即位に関しては、「三国史記」新羅本紀武烈王即位紀に、

太宗武烈王立。諱春秋。真智王子伊湌竜春一云竜樹之子也。唐書以為真徳之弟誤也。母天明夫人。真平王女。妃文明夫人。舒玄角湌女也。王儀表英偉。幼有済世志。事真徳。位歴伊湌。唐帝授以特進。及真徳薨。羣臣請閼川伊湌摂政。閼川固譲曰。臣老矣。無徳行可称。今之徳望崇重。莫若春秋公。実可謂済世英傑矣。遂奉為王。春秋三譲。不得已而就位。

とある。また、同書巻四列伝二金庾信中永徽五年条には、

真徳大王薨。無嗣。庾信与宰相閼川伊湌謀。迎春秋伊湌即位。是為太宗大王。

と記している。時に金春秋は、「三国遺事」太宗春秋公条に、

（◎前略）以永徽五年甲寅即位。御国八年。竜朔元年辛酉崩。寿五十九歳。葬於哀公寺東。

とあり、真平王二十五年（六〇三）生となり、五十二歳である。右史料から、金春秋の即位事情は他に比して詳細であり、明確に出来るのである。即ち、新羅では嗣子無き場合、国人による推戴が行われるが、和白の王推挙審議過程をよく伝えているのである。では、何故に他より、詳しい記事が残されているのであろうか。推察するに、金春秋推戴が国人一致したものではなく難航した末に決定した故ではなかろうか。即ち、金春秋の即位が容易なものでなかったことを窺える史料である。そこで、彼の即位事情について検討してみる。

史料に明かな如く、真徳王薨去により、王位に推挙されたのは閼川伊湌である。然るに、閼川は辞退して、金春秋を推挙している。これによって、初めて金春秋は即位しているのである。然も閼川の金春秋推挙は金庾信と閼川の策謀によるものである。この策謀の首謀者は金庾信の如くである。即ち、金庾信は金春秋即位実現のために閼川を策謀に加えた如くである。

では、何故に先ず閼川が推挙されたのであろうか。閼川に関する史料を拾ってみると、彼は善徳王代に新羅の将軍として、対百済戦に功を成して名を現わしている。(1) 而して、真徳王代に新羅政局の中枢の地位に就いている。即ち、「三国史記」新羅本紀真徳王元年二月条に、

拝伊湌閼川為上大等。

と記する如く、上大等に任じられているのである。上大等については同書新羅本紀法興王十八年四月条に記する如く、国政の最高官であって、中古王代に設置された官職であるが、その性格は、一国の宰相であると共に、慶州豪族集団支配の新羅に於ける慶州豪族の領袖であって、副王的な地位にあり、時には王権に対抗して、これを凌駕する権力を有している。また、上大等は一王代一名を原則としており、王でさえ、これを自由に廃立出来ぬものの如くである。(2) 事実、上大等の更迭は殆んど行われていない。(3) 以上

Hosei University Repository

の如く、閼川のは真徳王代に入って新羅政局に進出し、その権力を礎いた人物である。真徳王代に於ける彼の人望は絶大であったろう。閼川は単なる上大等ではなく、女主の下にあって事実上の新羅政治の統括者の如きである。武烈王即位紀には摂政と記している。真徳王代の閼川について「三国遺事」真徳王条は、

王之代有閼川公。林宗公。述宗公。虎林公。慈蔵之父。廉長公。庾信公。会于南山矜知巌。議国事。時有大虎走入座間。諸公驚起。而閼川公略不移動。談笑自若。捉虎尾撲於地而殺之。閼川公膂力如此。処於席首。然諸公皆服庾信之威。

の逸話を残している。閼川は以上の如く、真徳王代政局の第一人者であり、諸公の人望を集めていたのである。故に、彼の王位継承には、当然のことながら、当時、何等障害はなかったとしてよかろう。特に、彼を領袖として仰ぐ慶州豪族は最も望んだことであろう。閼川は名実共に王位継承の最右翼であったとしてよい。では、此く信頼を受け、実力あると思われる閼川が何故、金庾信に与して金春秋を推挙したのであろうか。閼川の判断理由は知る由もないが、金庾信が閼川を共謀者にせざるを得なかったのは、閼川が慶州豪族の支持を受けており、彼が王位継承の最短距離に居たためであることは明白である。爰に、慶州豪族と金庾信両勢力の分析が必要であろう。結論的に云えば、慶州豪族勢力が往時の力なく、金庾信等の新興勢力に対抗し得なくなりつつあったためであろう。そこで、金春秋の有力な援護者である金庾信について触れてみる。

前述した如く、金庾信の行動は、金春秋の推戴に慶州豪族の抵抗を予測した故である。従って、金庾信・金春秋は、これに対抗する勢力であったとしてよい。では、彼は如何にして、中古王代の新羅支配勢力を凌ぐ勢力を礎き得たのであろうか。金庾信は所謂慶州豪族ではない。彼は法興王十九年、新羅に併合された金官国の仇亥王の後裔である。(4) 即ち、仇亥の末子武力が真興王代に功を成し、新羅に重用されて京位を授けられたが、(5) 金庾信は武力の孫に当る。金庾信自身は父を舒玄、母を真興王弟葛文宗の娘万明としており、新羅人として歴朝に活躍しているが、(6) 当時の排他的な慶州豪族支配社会からは疎外された存在であったと考えてよいであろう。少くとも新羅政局外にあり、国政に参与出来なかったと云える。金庾信が新羅史に現われるのは真平王五十一年八月に対高句麗戦闘で功を挙げてからである。(7) 以後、善徳王代を通じて、新羅有数の武将として活躍している。(8) しかし、未だ政局に参画した形跡はない。彼が政局に重きをなすのは閼川と同様に真徳王代以降である。即ち、前掲史料に記する如く、真徳王代に入って、彼の威信は諸公を服せしめているのである。金庾信が新羅の有力豪族であったことは旧金官国の王族として、その旧領を安堵され、また、押梁州軍主であったことから推察出来るが、(9) 真徳王代に入って急速に中央政界に進出し、然も、慶州豪族勢力と対抗し得たのは何故か。結局、紆余曲折はあったにしろ、金庾信の策した金春秋即位が実現したことから、金庾信勢力の真徳王薨去時点に於ける慶州豪族勢力凌駕は間違いない。爰に、閼川の政局進出をも含めて、善徳王末年の反乱事件の解明が重要となる。また、金春秋が真徳王薨去時に即位し得た遠因としても、この反乱が想定

Hosei University Repository

されるのである。金春秋は史料に記する如く、五十二才にして即位している。では、何故に彼は五十二才の高齢まで即位し得なかったのか。真平王を嗣いだのは、真平王長女徳曼であるが、この善徳王即位と云う女子王位継承は新羅に先例のないことである。(10) また、新羅を通じて三例しかない変則的なものである。(11) そのために、善徳王代は唐太宗の指弾を受け、また、毗曇等の反乱理由ともなったのである。以上の如き善徳王即位について「三国遺事」王暦二十七善徳女王条割註は、

名徳曼。父真平王。母麻耶夫人。金氏。聖骨男尽。故女王立。王之匹飲葛文王。仁平甲午立。治四十年。

と説明する。即ち、聖骨男子尽る故に女子を立てたと云うのである。(12) しかし、この聖・真骨の別、聖骨の実体が明確に出来ぬ。現在、聖・真骨について解明されていない以上、善徳王即位理由を前掲史料だけに帰することは出来ない。では何故に善徳王即位が実現したのであろうか。時に金春秋は三十才であり、その父金竜春は少くとも真智王の薨年(13)から推察して五十四才以上である。然も、王位に最も近い王族であった。決して、王位を継承出来ぬ立場にいたとは考えられない。尚、真徳王即位時の金春秋は四十五才の壮年である。従って、善徳王即位と云う変則的王位継承の必要はなかったのである。そこで、金春秋が王位を継承出来なかった事由を指摘出来るとすれば、彼の祖父真智王の廃位事件を挙げることが出来る。即ち、「三国遺事」桃花女・鼻荊郎条に、

第二十五舎輪王。諡真智大王。（◎中略）御国四年。政乱荒婚。国人廃之。

とある如く、真智王が国人（慶州豪族）によって退位させられたことに端を発しているのではなかろうか。真智王が慶州豪族と対立した結果、その王統は新羅政局から排除され、慶州豪族支配社会に受け入れられなくなっていたのではなかろうか。この慶州豪族の意志が真智王系への王位の移行を認めなかった故に、変則的な善徳王の即位となったと云える。即ち、慶州豪族勢力が金春秋の政局への進出を阻止していたのであろう。況して、その王位継承は許し得ないものであったと云えよう。だが、真徳王薨去時には、その圧力が低下していた。即ち、慶州豪族勢力が後退していた故に、多少の抵抗を受け、閼川を利用せざるを得ない障害はあったが、金庾信の策謀によって金春秋の王位継承が実現したのである。

そこで、次節に慶州豪族勢力の後退原因として指摘した善徳王末年の反乱事件について究明してみる。

註

（1）「三国史記」新羅本紀善徳王五年五月条、同六年七月条、同七年十月条、同十一月条。
（2）井上秀雄稿「新羅政治体制の変遷過程」（「古代史講座」第四所収）参照。
（3）上大等の更迭例は、病いによる退官以外には見られない。
（4）「三国史記」新羅本紀法興王十九年条。
（5）「三国史記」新羅本紀真興王十四年七月条、同十五年七月条。
（6）「三国史記」巻四一列伝一金庾信上参照。序ながら、金庾

Hosei University Repository

信は金春秋より八才年長である。

(7)「三国史記」新羅本紀真平王五十一年八月条。

(8)「三国史記」新羅本紀善徳王十一年条、同十三年九月条、同十四年条。

(9)「三国史記」新羅本紀法興王十九年条、同善徳王十一年条。

(10)「三国史記」新羅本紀善徳王即位紀。

(11)「三国遺事」善徳王知幾三事条、善徳王・真徳王・真聖王の三例である。

(12)今西竜稿「新羅骨品考」(「史林」七巻一号所収)、池内宏稿「新羅の骨品制と王統」(「満鮮史研究」上世第二冊所収)、前問恭作稿「新羅の世次と其の名につきて」(「東洋学報」十五巻二号所収)、末松保和稿「新羅三代考」(「新羅史の諸問題」所収)等の研究があるが、未だ解明されたとはいえない。

(13)西暦五七九年没。「三国史記」新羅本紀真智王四年七月十七日条。

(三)

慶州豪族勢力崩壊の原因となったと思われる善徳王末年の反乱は、金庾信勢力の政局掌握の契機となった。そこで、この反乱について分析を試みることとする。

善徳王十六年の反乱に関する史料は、「三国史記」新羅本紀善徳王十六年正月条に、

毗曇。廉宗等謂女主不能善理。因謀叛挙兵不克。八日。王薨。謚曰善徳。葬于狼山。

と記し、また、同真徳王元年正月十七日条に、

誅毗曇。坐死者三十人。

とあり、同書(巻四一)列伝一金庾信上十六年丁未条に、

是善徳王末年。真徳王元年也。大臣毗曇。廉宗謂女主不能善理。挙兵欲廃之。王自内禦之。毗曇等屯於明活城。王師営於月城。攻守十日不解。丙夜大星落於月城。毗曇等謂士卒曰。吾聞落星之下。必有流血。此殆女主敗績之兆也。士卒呼吼声振地。大王聞之。恐懼失次。庾信見王曰。吉凶無常。惟人所召。故紂以赤雀亡。魯以獲麟衰。高宗以雉雊興。鄭公以竜鬬昌。故知徳勝於妖。則星辰変異。不足畏也。請王勿憂。乃造偶人抱火載於風鳶而颺之。若上天然。翌日。使人傳言於路曰。昨夜落星還上。使賊軍疑焉。又刑白馬祭於落星之地。祝曰。天道則陽剛而陰柔。人道則君尊至臣卑。苟或易之。即爲大乱。今毗曇等以臣而謀君。自下而犯上。此所謂乱臣賊子人神所同疾。天地所不容。今夫若無意於此。而反見星怪於王城。此臣之所疑惑而不喩者也。惟天之威。従人之欲。善善悪悪。無作神羞。於是督諸將卒奮撃之。毗曇等敗走。追斬之。夷九族。

とあるのみである。この反乱は上大等毗曇・廉宗等が善徳王に対して、「女主不能善理」を理由として起こした反乱である。ために、善徳王は乱中に横死した如くである。反乱そのものは半月足らずで真徳王の下に鎮圧され、三十余名が誅されたのである。しかし、この反乱が与えた新羅政局の動揺・混乱は金庾信伝に記する如く、甚大なものであった。では、この反乱は何故発生したの

Hosei University Repository

であろうか。善徳王に対する反乱理由は具体的には何にあるのであろうか。反乱主謀者毗曇は上大等として新羅政局の中枢にあった。即ち、「三国史記」新羅本紀善徳王十四年十一月条に、

拜伊湌毗曇爲上大等。

とある如く、反乱二年前に上大等に任じられた。従って、彼は慶州豪族勢力の領袖として、その勢力を背景として反乱を起こしたと考えてよい。即ち、三十余名に昇る反乱勢力は慶州豪族の大多数であって、然も、その主流勢力であったとしてよかろう。この慶州豪族が反乱勢力であるならば、史料に記する如く、その善徳王に与えた衝撃は強いものであったろう。新羅支配機構が根底から崩れ兼ねないものであり、国家そのものの浮沈を左右する事件であると云っても過言ではあるまい。特に、善徳王は全く孤立した状態に追い込まれた状態にあり、政権を放棄せざるを得ない立場にまで後退していたと考えてよい。この時点で金庾信勢力が善徳王側に立ったことによって、新羅政局に於ける彼の政治的立場が強加されたのである。

此くも激しい慶州豪族の反乱を起こした毗曇は善徳王の廃位を迫っている。その理由の要因を探るならば、真平王末期から後退しつつあった新羅国勢が最悪の状態を迎えたことを挙げ得よう。(1) 特に、百済に義慈王が立つと、(2) その新羅侵略は過激となり、百済・高句麗連合によって、新羅は全くの苦境に陥り、真興王代の生彩を失ってしまったのである。その最大の打撃が善徳王十一年七月の国西四十余城の喪失であり、同年八月の高句麗による党頃城の、また、百済による大耶城の敗北である。(3) 従って、善徳王治世の国内政局は動揺していたであろう。その現状打解策として、苦境脱却のための唐援兵派遣の要請が行われた。(4) この唐軍出師の要請が反乱の直接原因をなして来るのではる。

善徳王の即位自体、新羅に於いては異例なことであった故に、慶州豪族の推戴を受けたにせよ、善徳王の地位は極めて不安定であったと云える。それに加えて、国威の低下、国域の縮小と云う非常事態を迎えた結果、善徳王は新羅政局から孤立していたと思われる。慶州豪族の善徳王に対する反発も強くなっていたであろう。そこへ、唐軍派遣要請の回答として示めされた唐太宗の新羅救国策が慶州豪族を刺激するものであった。即ち、「三国史記」新羅本紀善徳王十二年九月条に、

遣使大唐上言。高句麗百済侵凌臣國。累遭攻襲數十城。兩國連兵。期之必取。将以今玆九月大擧。下國社稷必不獲全。謹遣陪臣歸命大國。願乞偏師。以存救援。而謂使人曰。我實哀爾爲二國所侵。所以頻遣使人。和爾三国。高句麗百済旋踵飜悔。意在呑滅而分爾土宇。爾國設何奇謀。以免顚越。使人曰。吾王事窮計盡。唯告急大國。冀以全之。帝曰。我少発邊兵。惣契丹靺鞨直入遼東。爾國自解。可緩爾一年之圍。此後知無継兵。還肆侵侮。四國俱擾。於爾未安。此爲一策。我又能給爾數千朱袍丹幟。二國兵至。建而陳之。彼見者以爲我國。必皆奔走。此爲二策。百済国恃海之險。不修機械。男女紛雜。互相燕聚。我以數十百船。載以甲卒。銜枚泛海。直襲其地。爾国以婦人為主。為鄰国軽侮。失主延寇。靡歳休寧。我遣一宗支。與為爾国主。而自不可獨王。當遣兵營護。待爾国安。任爾自守。此為三策。

Hosei University Repository

爾宜思之。將從何事。使人但唯而無對。帝嘆其庸鄙。非乞師告急之才也。

と記する唐太宗の新羅窮状打解策である。(5) 爰に示された案は実行されず、翌年、唐太宗は高句麗に里玄奨を遣して、高句麗・百済の新羅攻略を諫めたのであるが、唐太宗の第三策が、(6) 新羅に与えた衝激は大きかった。即ち、唐太宗の連枝を王に戴いて自国を守ることは、新羅の現状打解には最も効果的であろうが、この案を受け入れることは、新羅の自立を放棄することに他ならない。然も、善徳王を戴く現状では唐太宗の指摘する如く、窮地脱却は至難なことであり、唐の援兵も望めないのである。唐太宗の目的が何にあるかは明かである。云う迄もなく新羅の完全掌握にある。しかし、新羅の現状もまた、滅亡の危機にある。当然、国論は激したであろう。史料は伝えないが善徳王の廃立が論議の争点となったことは推察に難くない。即ち、善徳王を支持して現状を維持するか、それとも、唐太宗の指弾を排するために善徳王を廃して、新王を推戴して唐の新羅への食指を断つかである。爰に、毗曇等慶州豪族が「女主不能善理」として、その退位を迫った原因があると考える。実際には唐使里玄奨の高句麗説諭となり、高句麗説得失敗による唐軍の高句麗遠征となって、新羅の危機は一応緩和されたが、(7) この唐太宗の与えた波紋は新羅政局を揺振り続けたであろう。恐らく、慶州豪族は新王推戴を策していたであろう。毗曇は自ら王位を得んとしていたかも知れない。この間の事情は知る由もないが、新羅の主要支配勢力が唐太宗の打解策提示によって善徳王から離反したことは事実としてよかろう。この結果、善徳王は劣勢となったのである。毗曇を上大等としたのも善徳王の妥協策・懐柔策であったかも知れない。兎に角、善徳王十五年を経て十六年を迎えると善徳王は全く孤立してしまっている。反乱時の善徳王の狼狽ぶりがよく証明している。この窮地に陥った善徳王側に、それまで中央政局の慶州豪族集団から排除され、疎外されていた非慶州豪族が糾合されたのも至極当然な成り行きであったろう。その中心勢力が金官国王族の裔たる金庾信一派であったとすることが出来る。また、慶州豪族でありながら、その主流勢力ではなかった閼川伊湌等である。爰に、真徳王代、彼等が新羅政局の中枢を掌握し得た理由がある。特に、金庾信は反乱鎮圧の主要勢力を率いており、その点で彼の発言力が真徳王代政局に群を抜いていたのである。では、この時点で金春秋は何故に善徳王を嗣ぎ得なかったのであろうか。後に記するが、既に金庾信・金春秋の政治的結束は強固なものになっていたのである。また真徳王代、事実上金庾信が政局を掌握しているのである。これは閼川等慶州豪族勢力を無視出来なかった故と考えられる。その一例として閼川の上大等任官がある。これは新羅社会の持つ排他的な骨品体制(8)の障害を崩すまでにはいかなかったためであろう。骨品体制が変質するのは中代王代・武烈王の後年である。(9) 従って、この時点では金庾信等新興勢力と閼川等慶州豪族の妥協が必要であったであろう。実際に、当時の朝鮮半島情勢が新羅に内乱を続ける余裕を与えなかったのである。即ち、真徳王元年十月、翌二年三月と百済の侵入が相次でいるのである。(10) 従って、早急に国内の動揺を鎮め、国内を統一する必要があったのである。故に、反

Hosei University Repository

乱後の勢力各派の妥協が行われ、金春秋よりは抵抗の少い真徳王が女子の身で王位を継承したのであろう。そして、真徳王代、金庾信・金春秋は着実に政治基盤を礎いていったのである。それは「三国史記」新羅本紀真徳王紀・巻四一・四二列伝一・二・金庾信上・中・「三国遺事」真徳王・太宗春秋公の各条等から窺えよう。即ち、真徳王代の新羅窮状の打解に活躍しているのは、外交面に於ける金春秋であり、軍事面に於ける金庾信である。この結果、彼等の勢力は新羅政局の中心勢力として揺ぎないものとなるのである。これが金春秋の王位継承を実現せしめたと云えよう。

註

（1）善徳王代は旧辰韓の支配領域にまで新羅国域は後退していたと云われる。井上秀雄稿「新羅政治体制の変遷」（「古代史講座」第四所収）参照。

（2）善徳王十年・六四一年即位。

（3）「三国史記」新羅本紀善徳王十一年七月条・同八月条。

（4）「三国史記」新羅本紀善徳王十二年九月条、「旧唐書」巻一九九上東夷新羅・貞観十七年条。

（5）「新唐書」巻二二〇東夷高麗条参照。

（6）「旧唐書」巻一九九上東夷高麗・貞観十七年条、「三国史記」高句麗本紀宝蔵王三年正月条、同新羅本紀善徳王十三年正月条、同百済本紀義慈王四年正月条。

（7）「三国史記」新羅本紀善徳王十四年五月、同高句麗本紀宝蔵王四年条、「旧唐書」巻一九九上東夷高麗・「新唐書」巻二二〇東夷高麗の条。

（8）骨品体制については武田幸男稿「新羅の骨品体制社会」（「歴史学研究」二九九号所収）参照。

（9）武田氏は骨品体制の変質例として「三国史記」巻四七列伝七竹竹条を挙げ、善徳王代に変質現象ありとされるが、筆者は、百済・高句麗の滅亡による両国人の官僚体制組入れに求められると考える。

（10）「三国史記」新羅本紀真徳王元年十月条、同二年三月条。

（四）

さて、善徳王十六年正月の反乱事件を契機とする新羅政局の勢力交代を追究して来たが、この新興勢力たる金庾信と金春秋の関係は如何なるものであろうか。何故に、金庾信は金春秋を王位に推挙したのであろうか。

金庾信が慶州外豪族でありながら、真徳王代新羅政局の重鎮となり得たのは善徳王十六年正月の反乱の結果であり、金春秋の王位継承が実現したのも、金庾信の新羅政局掌握の結果である。だが、この反乱に金春秋が関与していたとする史料を見ることは出来ない。事実、金春秋は直接には反乱事件に関係していなかったかも知れぬが、しかし、前述した如く、金春秋が王位を継承し得た最大の理由が、この反乱にあることを考えれば、彼が反乱事件と無関係であるとは云い切れぬし、また、この反乱が新羅政局の主要勢力たる毗曇等慶州豪族勢力と、善徳王支持勢力の対立であり、新羅政局の大転換を齎した事件であることを考慮するならば、金春秋が全くの局外者であったとすることは出来ぬであろ

Hosei University Repository

う。そこで、先ず金庾信と金春秋の関係を追究してみる必要がある。

金春秋が史料上に現われるのは善徳王十一年八月であるが、[1]それ以前に金庾信と金春秋が何等かの関係を持っていたのか否かは不明である。ただ、真平王五十一年八月の高句麗娘臂城攻略に際して、金竜春・金舒玄・金庾信の名が見えるから、或る交流はあったかも知れない。両者の親交を伝える記事としては、「三国史記」新羅本紀善徳王十一年冬条に記する金春秋高句麗派遣の際のこととして伝える、「三国史記」一巻四 列伝一金庾信 上 善徳大王十一年壬寅条である。即ち、

（◎前略）春秋恨之。欲請高句麗共以報百済之怨。王許之。将行謂庾信曰。吾與公同體。為国股肱。今我若入彼自害。則公其無心乎。庾信曰。公若往而不還。則僕之馬跡必践於麗濟兩王之庭。苟不如此。将何面目以見国人乎。春秋感悦。與公互噬手指。歃血以盟曰。吾計日六旬乃還。若過此不來。則無再見之期矣。遂相別。（◎中略）春秋入高句麗過六旬未還。庾信慷得国内勇士三千人。相語曰。吾聞見危致命。臨難忘身者。烈士之志也。（◎中略）今国之賢相。被他国之拘執。其可畏不犯難乎。於是衆人曰。雖出萬死一生之中。敢不従将軍之令乎。遂請王以定行期。（◎下略）

と記している。確に金春秋の高句麗派遣は国運を賭しており、金庾信・金春秋の会話は悲愴感から出たものかも知れぬが、単に、それだけであったとは云えない。やはり、共に国の股肱として共通した使命感に支えられた盟友以上の関係を感じさせる。これは金春秋の妃文明夫人が金庾信の季妹であることと関係がある。[2]即ち、金春秋の妃文明夫人は金庾信の季妹文姫（阿之）であるが、その結婚譚が「三国遺事」太宗春秋公条にあり、その事情を伝えている。金春秋の婚姻が何年であるかは不明であるが、金庾信の策謀が感じられるのである。この善徳王代の婚姻は、金庾信が金春秋との政治的結び付きを策したものの如くである。[3]その結果、金庾信・金春秋は親族となり、兄弟の関係にあることを知ることが出来る。即ち、金庾信・金春秋の関係は親族関係にあると共に金庾信の行動から、両者の政治的結托によるものと思われる。金庾信・金春秋の関係が政治的結び付きであるとするならば、当然のこととして、金春秋も反乱時に善徳王側にあって、金庾信と同一行動をとっていたとすることが出来る。前掲、善徳王十一年の記事からも推察することが出来よう。では、何故に金庾信は金春秋との政治的結托を企てたのであろうか。次に触れてみる。

さて、金庾信が金春秋に政治的な接近を図ったこと、また、金春秋が金庾信の策略に乗じた理由は何であろうか。この解明が必要であろう。これによって、所謂金春秋等の新興勢力、即ち、慶州豪族集団支配を打倒して政権を掌握した政治勢力の全容を知り得るであろう。先ず、両者の政治的立場、新羅社会に於ける境遇を見てみる。

金庾信は云うまでもなく、金官国王族武力の末裔である。従って、彼は新羅支配勢力外にある人物である。その上に、彼の父舒玄が「三国史記」一巻四 列伝一金庾信上にある如く、真興王弟粛訖宗の娘万明と私に婚姻関係を結んだために慶州豪族の指弾を受けて

Hosei University Repository

いたと思われる。(4) 然るに、彼の率いる政治勢力は、その出自及び押梁州軍主と云う地位から、慶尚南道金海を中心とする基盤の上に安定していたと思われる。また、金庾信自身、「三国史記」列伝にある如く、真平王五十一年八月の高句麗戦以来、度々の戦役に功を挙げている。この点で金庾信は当時の支配勢力たる慶州豪族に対する不満を持っていたとしてよかろう。一方の金春秋は当時の王位に最も近い王族として、その政治の中枢にあるべきであるが、(二)に記した如く、彼は曽父真智王廃位事件の故に政局から疎外された存在であった。即ち、真智王と国人（慶州豪族）との対立の故に、慶州豪族と金春秋の王統の確執が彼を孤立せしめていたとしてよい。特に、彼が王位を継承し得なかった不満は十分に察知し得る。(6) 彼は実際には国運を賭した程の外交活動・対高句麗交渉に従事しながら、新羅政局からは、無視されているのである。善徳王の即位事情に見られる異例の王位継承が慶州豪族勢力の故であることを考えるならば、彼が持った対慶州豪族感情は想像するに難くない。爰に、金庾信・金春秋両者の善徳王代に於ける新羅政局・社会に対する共通した立場がある。この両者の慶州豪族支配体制に対する共通した不満が、両者の政治的結束を促し慶州豪族に対立したものと考えられる。然も、善徳王治世は百済・高句麗の侵入によって、政局が甚だ不安定であり、善徳王十二年九月の唐太宗の指摘が善徳王の地位さえも揺振る混乱を与えたことによって、慶州豪族支配体制の危険性を痛感せしめていたのである。即ち、金春秋・金庾信の新興勢力は、各々の持つ門地の貴種・慶州外豪族勢力の領袖たる実力を糾合することによって、彼等の政局進出を阻止する慶州豪族と、新羅の現状を打解し得ない慶州豪族支配体制を打倒せんとする非慶州豪族勢力であると云い得よう。この金春秋・金庾信を中心とする汎新羅政治勢力(7)とも云うべき新興勢力が、慶州豪族を打倒する機会となったのが上大等毗曇・廉宗等を中心とする慶州豪族の反乱であったと云えよう。それ故に新興勢力は善徳王側に立ち、これに勝利を収めて、これを凌駕する勢力となり得たのである。しかし、未だ新羅社会体制・支配体制を完全に掌握改変する程の勢力として、その政治力を発揮するまでには至らなかった。それ故に、金春秋の王位継承が遅れたし、また、閼川等慶州豪族の政局に於ける地位が存在したと考えるのである。爰に、金春秋即位時の複雑な王位継承事情が存在したのである。

註

(1) 従って、金春秋の新羅政治史上への出現は対高句麗交渉に始まる。

(2) この文明夫人の所出が第三十代文武王法敏である。従って中代王代が中古王代と全く異質の王系を形成したこととなる。

(3) 同史料は両者の出合を蹴鞠の会と記し、金庾信が金春秋を自宅に伴ったと記している。

(4) この舒玄・万明の婚姻及び、金春秋・文姫の婚姻の社会的問題については末松保和稿「新羅三代考」第一章（「新羅史の諸問題」所収）参照。

(5) 「三国史記」巻三四志三地理一良州金海小京条参照。

Hosei University Repository

（6）金春秋は真智王孫であると共に真平王孫である。また、彼以外に王位継承者としての該当者は系譜上に見当らない。

（7）この言葉は適切でないかも知れないが、武列王代に於ける百済人の官僚体制吸収・京位授与、また、「三国史記」巻四七列伝七竹竹条等から判断して、慶州外豪族を糾合した官僚体制を志向していたと考えられる武烈王権体制を想定するならば、また、七世紀新羅の動向を考えるならば、当時の金春秋等の勢力が広く新羅全域に亘る勢力を糾合せんとしていたと考えてよかろう。

（五）

以上の如く、金春秋が王位を継承した背景には、七世紀中葉の新羅政局を根底から覆す政治勢力の交代、新羅支配体制の変化があることを指摘したが、爰で、要約しながら金春秋の王位継承が有する新羅史上の意義、及び問題点に触れてみる。

先ず、金春秋王位継承の実現は、金春秋・金庾信等を中心勢力とす慶州外豪族の、中古王代の支配勢力たる慶州豪族に対する、また、その支配体制に対する勝利であった。この慶州豪族勢力と新興勢力の新羅政局に於ける勢力転換は、善徳王代の新羅国勢の後退による不安定な政治情勢の中で起こった上大等毗曇等の反乱によって表面化し、真徳王代に確固たるものになったのである。その目標は新羅を百済侵略下の劣勢から救うことにあった。そのためには、旧来の連合政権的支配体制を支持する慶州豪族を打倒し、新羅王権を確立する必要があった。即ち、王権の強加による挙国体制の整備である。それ故に、排他的な支配勢力たる慶州豪族を抑えて、慶州外豪族を糾合した新羅中央集権体制を目指す金春秋・金庾信勢力の勝利は、新羅史上、一時代を画するものであり、金春秋の即位は、その第一歩とすることが出来よう。新羅全盛期の出現は文武王の朝鮮半島統一事業の成功にあるが、それと共にやはり、この金春秋（太宗武烈王）の即位が国内的には新時代を告げる最大要因といえる。即ち、新羅専制王権時代への移行である。爰に、太宗武烈王即位を以って「三国史記」「三国遺事」共に時代区分点としている事由がある。所謂中代王代である。この中代王代は約一世紀（六五四・太宗武烈王即位～七八〇・恵恭王没）に及ぶが、新羅全盛期である。その基礎は金春秋王位継承実現に至る間の慶州豪族勢力撃退にあったとしてよかろう。また、新羅社会を支配する骨品体制に支えられた慶州豪族支配体制の崩壊の故でもある。

次に、金春秋の即位を以って新羅歴代王が真骨身分とされ、真徳王以前の聖骨と区別された理由も、この金春秋王位継承の背景にある新羅政局の変革に何等かの関係ありと思われる。これもまた、一致することは「三国史記」「三国遺事」共に太宗武烈王即位を以って真骨とすることである。この武烈王即位を以って真骨とした理由は、新羅史研究の上で論議を呼んだ問題ではあるが、筆者は善徳王の即位にあると考える。本稿に記した如く、善徳王の即位は異例であった。また、後世、その王位継承を正統化する上で何等かの理由付けが必要であったろう。そこに、聖・真両骨の区別が生じたと思われる。本稿では詳しく触れぬが、筆者は聖

Hosei University Repository

・真両骨関係記事の記載から考えて、聖・真両骨の区別が事実存在したとは考えられないのである。

以上の如く、金春秋の王位継承は単なる王統の移行だけではなく、新羅史を大きく転換させた新羅政局の勢力交代の現われであり、また、新羅最盛期を出現せしめる要因をなしているのである。さらに、新羅史上の問題たる時代区分・聖・真両骨区分の分岐点に位置付けられている如く、新羅国家に一時代を画するものである。この聖・真両骨については後日に譲るが、金春秋の新羅王位継承が新羅史に占る意義については一応の考証をしたつもりである。御叱正を賜われば幸甚である。